

日本の心理学分野における食事の研究動向と今後の課題

大塚 己 恭*

A review of the literature on meals in the field of psychology in Japan and future research directions.

OTSUKA Miyuki

Abstract

This paper reviews the overall status of meals in the field of psychology in Japan and future directions for research. Using online databases such as CiNii, J-STAGE, and Google Scholar, articles published in academic journals in the field of psychology between 1926 and 2019 were searched using “breast-feeding,” “meal,” or “eating” as keywords. A total of 73 articles were classified according to the content and subjects of the study. It was found that the main research themes around meals in studies of psychology included the clinical complications of eating disorders in adolescence and the interactions of infants during mealtime. Previous research suggested that eating experiences in childhood affect eating behaviors in adulthood. Therefore, it is important that recommendations for interventions preventing the onset of eating disorders be based on mealtime interactions from infancy. However, the studies on meals during infancy did not address clinical issues. These findings suggest the need to clarify what type of relationships in mealtime interactions ensure the mental wellbeing of children and prevent eating disorders.

Keywords : mealtime, eating disorder, interaction, psychology, literature review in Japan

I. はじめに

食事は人間が生きていく上で欠くことのできないものである。食事は単なる栄養補給や身体的発達のためだけでなく（堤, 2011；吉田・岡崎, 2009）、食事での相互交流により心理的発達が促されるため、心身の発達において重要な場面といえる。乳児が誕生して初めて口にするのは、多くの場合は母乳であり、乳児は母親の乳房を求めることで、食べることを学ぶ。Freudは口唇期に乳児が授乳による栄養補給と同時に、口唇周辺の粘膜が刺激されることによって性的刺激を得ると述べている（井村・小此木・懸田・高橋・土井, 1969）。また、Erikson（1959 小此木訳 1973）は乳児期の発達課題を基本的信頼の獲得としている。口を通した快体験は、自分と周囲の世界への信頼感に、逆の不快体験は不信感につながると考えられる。母親と見つめ合い、微笑み合い、楽しい、暖かいやりとりの中で母乳が与えられれば、子どもは生理的満足感と心理的満足感を得ることができる。そして、子どもは親に愛されている自分を実感し、肯定的な自己感を育てることにつながり、心の発達が促される（田中, 1997）。このように、口を通して初めて周りの世界とのふれあい、さまざまな刺激を得る乳児にとって、口は重要な器官であるといえよう。

キーワード：食事、摂食障害、相互交流、心理学分野、国内文献レビュー

*平成27年度生 人間発達科学専攻

授乳から離乳食に変わる時期には、子どもと養育者は1対1の相互交流のパターンを形成し、より長い時間のやりとりが可能となっていく(外山, 2008)。言語発達が進んでくると、食事は子どもたちにとって食べること以外の体験を共有する応答的な場となる(外山・無藤, 1990)。乳幼児期のポジティブな食事体験は親子関係の良好さに影響を与え、子どもが大人になった時の食事の楽しさに影響を与えることがわかっている(伊東・竹内・鈴木, 2007; 古郡・菊池, 2009)。その反対に、食事での親子の相互交流が不適切な場合、幼児期以降に子どもが食事を慰めの道具に使うことや、友人関係でのコミュニケーションを回避する傾向を持つこと、思春期に食に関する問題が起こる可能性が報告されている(Anderson, Gooze, Lemeshow & Whitaker, 2012; Dally, Gomes & Isaacs, 1979 渡辺・横山訳 1984; Faith, Scanlon, Birch, Francis & Sherry, 2004)。

このように、乳幼児は食事を通して生理的満足感と同時に心理的満足感を得ることができ、それにより身体的・精神的発達が促されると考えられる。乳幼児期からの生涯にわたる食事体験の積み重ねが、心身の発達に重要であるといえる。これまでに、身体の成長や健康維持(加藤・村田・河野・谷口・大竹, 2004; 吉田・岡崎, 2009)、摂食障害に関する研究(田邊・田代・田中・嶋田, 2018)など、栄養学、生理学、文化人類学、臨床心理学、医学など様々な分野で食事の研究がなされてきているが、それらを系統的にレビューした文献は少ない。食事は時代や地域の影響を受けやすいものでもある(山下, 1992)。そのため、日本の心理学分野でも研究状況を整理し、今後の課題を整理する必要があると思われる。

Ⅱ. 目的

本研究では日本の心理学分野における先行研究の知見から、食事に関する研究を概観し、今後の研究課題を明らかにすることを目的とした。

Ⅲ. 方法

1. 分析対象

オンラインデータベースCiNii、J-STAGE、Google Scholarを用いて、「授乳」「食事」「摂食」のいずれかをキーワードに用い、論文を検索した。心理学分野での研究の動向を調査するため、1926年から2019年7月末までに刊行された学術雑誌の『カウンセリング研究』『家族心理学研究』『教育心理学研究』『質的心理学研究』『社会心理学研究』『心理学研究』『心理臨床学研究』『青年心理学研究』『パーソナリティ研究(旧性格心理学研究)』『発達心理学研究』『犯罪心理学研究』『Journal of Health Psychology Research(旧健康心理学研究)』に掲載された論文を対象とした。81件が該当し、このうち、書評・展望・意見論文の8件を除外した、73件を分析対象とした。

2. 分類の方法

分析対象となった73本の論文の内容について、どのような食事に関する事柄が扱われているのかと、その研究対象で分類した。表1、表2はそれらの詳細である。

表1 食事に関する研究内容の分類とその例

分類	例
1 食事の自立	食事技能の発達、食事の自立度など。
2 社会的交流	食事での相互交流、食事での会話など。
3 食事での葛藤	食事での母親の不快感情、子どもの反抗行動など。
4 養育行動	授乳や食事をあげるなどの子どもの世話など。
5 健康に関する問題	食事療法など。
6 摂食障害に関する問題	痩身願望、ダイエット思考、摂食障害傾向、摂食障害など。
7 その他	上記に該当しない研究。

表2 研究対象の分類

分類	内容
1 乳幼児期	0歳から6歳（就学前）までの子どもを対象に研究を行ったもの。
2 児童期	6歳から12歳までの小学校に通う子どもを対象に研究を行ったもの。
3 思春期	12歳から15歳までの中学校に通う思春期前期の子ども、および15歳から18歳までの高校に通う思春期後期の子どもを対象に研究を行ったもの。
4 青年期	18歳から24歳までの短期大学・専門学校・4年制大学・大学院に所属するまたは、研究開始時に所属していた学生、および当該年齢に該当するものを対象としたもの。
5 成人期	25歳から39歳を対象に研究を行ったもの。
6 中年期	40歳から59歳を対象に研究を行ったもの。
7 老年期	60歳以上を対象に研究を行ったもの。
8 母子	母と子どもの両方を対象に研究を行ったもの。
9 家族	家族を対象に研究を行ったもの。

IV. 結果と考察

1. 全体の傾向

1) 出版年による食事の研究の変遷

心理学分野における食事に関する論文数の割合の推移を図1に示した。食事に関する論文は1960年代から掲載され始めていた。当初の研究では、子どもの発達状態を把握する1つの領域として、または子どもが反抗する場面の1つとして取り上げられており（松原, 1964）、食事が主たる研究テーマとしてとりあげられたものではなかった。

その後、1970年から1984年の間は該当する論文はなく、食事に関する研究が再び掲載され始めたのは1985年以降であった。1989年からはほぼ毎年1本以上の論文が掲載されるようになった。1990年代以降は、食事における子どもと大人の相互交流の研究と、摂食障害の問題に関する研究が主な研究テーマとして取りあげられていた。

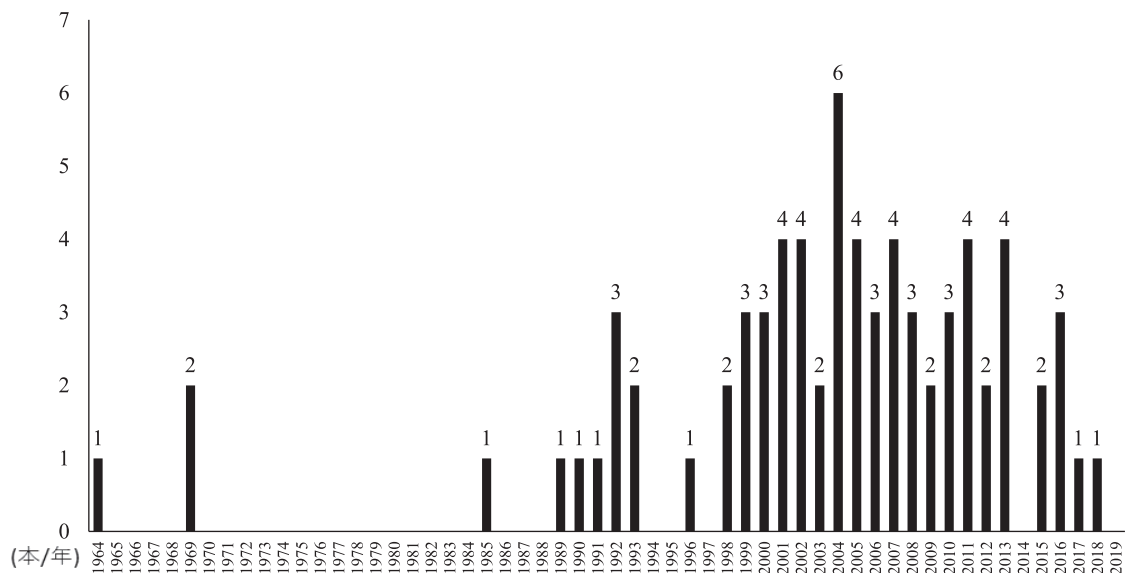


図1 各年の心理学研究における食事に関する論文の本数

2) 食事に関する研究内容

分析対象の73本全ての論文の食事に関する研究内容と、研究対象について分類した結果を図2、3に示した。研究対象については1つの論文につき2つ以上の研究対象が含まれる場合には、該当するそれぞれの分類に当てはめた。また、その研究対象に母子、家族が含まれる研究の本数を括弧内に示した。

食事に関する研究内容では、「摂食障害に関する問題」が47本（64.38%）と一番多く、次いで「社会的交流」が16本（21.92%）、「食事での葛藤」が3本（4.11%）、「養育行動」が3本（4.11%）、「食事の自立」が2本（2.74%）、「健康に関する問題」が1本（1.37%）、「その他」が1本（1.37%）であった。

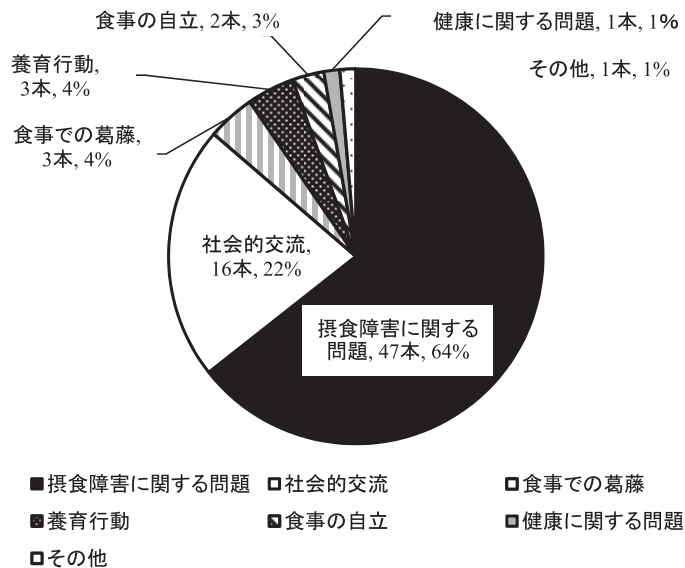


図2 研究内容の分類の内訳 (N=73)

研究対象では、「青年期」が43本（44.79%）と一番多く、次いで「乳幼児期」が18本（18.75%）、「思春期」が17本（17.71%）、「児童期」が12本（12.50%）、「成人期」が5本（5.21%）、「中年期」が1本（1.04%）、老年期を対象としたものはなかった。

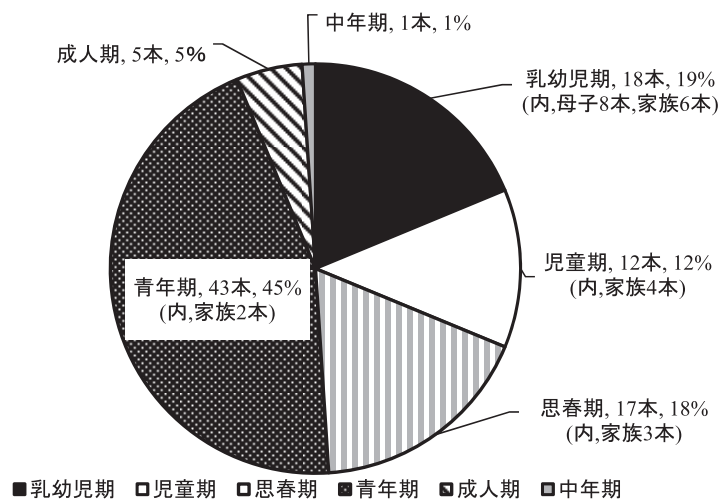


図3 研究対象の分類の内訳 (N=96、複数回答)
※括弧内に母子、家族を対象とした論文数を掲載した。

以上のことから、食事に関する研究は1989年から多くなり、研究が活発になっていることが示された。近年の

研究テーマは主に、摂食障害に関する臨床的な課題と、食事での相互交流に関する研究であり、主に乳児期から青年期までを対象としていることが明らかにされた。また、乳幼児期から青年期における研究は、母子または家族を対象としている研究が含まれていた。このことから、心理学研究では、食事に関する現象を、子どもの個別の問題として捉えるのではなく、家族という視点でとらえていることがうかがえる。

次節では「摂食障害に関する問題」と「社会的交流」に関する研究について、研究対象の分類ごとにどのような研究がなされているのかをまとめていく。

2. 摂食障害に関する問題の研究

1) 全体の傾向

摂食障害に関する問題を扱った研究は47本であった。そのうち、摂食障害の診断があるものを対象とした臨床群の研究は18本 (38.30%)、摂食障害の診断のない一般人を対象とした非臨床群の研究は29本 (61.70%) であった。臨床群を対象としたものは、主に治療の効果や病態理解をテーマにしていた。非臨床群を対象としたものは、摂食障害傾向や痩身願望などにどのような要因が関わっているのか明らかにすることをテーマにしていた。

次に、対象を女性に限定したものは34本 (72.34%)、男性に限定したものは4本 (8.51%) であり、女性を対象とした研究が大半であった。摂食障害を発症することが多いのは青年期の女性であると指摘されている (Hoek & van Hoken, 2003)。そのため、心理学分野でも摂食障害に関する問題の主な対象は思春期・青年期の女性であるのだと思われる。一方で、近年では摂食障害の患者のうち、4～5%は男性であり (末松, 1993)、男性でも痩せ願望が強くなっていることが指摘されている。心理学分野の研究においても、青年期の男性の痩身願望を規定する心理的メカニズムを明らかにしようとする研究 (浦上・小島・沢宮・坂野, 2009) や、摂食障害傾向のある青年の拒食と過食の心理的プロセスを明らかにしている研究が行われていた (奥田・岡本, 2009)。しかしながら、全体的に男性を対象とした研究が少なく、男性の摂食障害に関する研究の取り組みが今後の課題だといえる。

研究対象の分類では、「青年期」が37本 (62.71%) と一番多く、次いで「思春期」が13本 (22.03%)、「成人期」が5本 (8.47%)、「児童期」が3本 (5.08%)、「中年期」が1本 (1.69%)、乳幼児期・老年期を対象としたものはなかった (図4)。

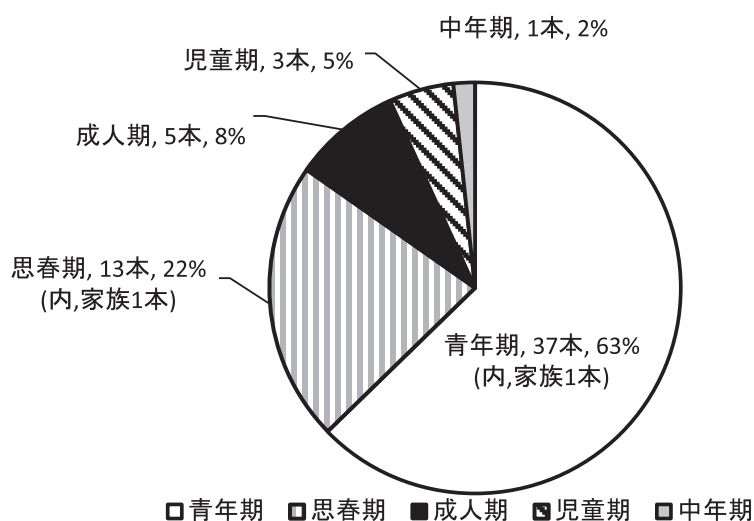


図4 摂食障害に関する問題の研究における研究対象の分類の内訳 (N=59、複数回答)
※括弧内に母子、家族を対象とした論文数を掲載した。

2) 研究対象ごとの傾向

a) 児童期

児童期を対象とした研究は47本中3本(5.08%)であった。児童期のみを対象とした研究ではなく、児童期から青年期までを対象とし、年齢による比較がなされていた。摂食障害が深刻化する予防のため、前駆的な症状が児童期から見られるのかといった食行動の異常の実態調査(伊藤他, 2016)や、摂食障害を引き起こしうる要因を検討するなど(鈴木・伊藤, 2002)、摂食障害の予防やメンタルヘルスの改善に焦点をあてた研究が行われていた。

b) 思春期

思春期を対象とした研究は47本中13本(22.03%)であった。思春期に起こる身体的発達の受け入れや性同一性と摂食障害傾向の関連の検討(藤原・児玉, 1992; 伊藤, 2001)、摂食障害を持つ臨床群への心理療法の有用性や効果、病態理解についてが主な研究のテーマだった(齊藤, 2000; 加川, 2006)。

摂食障害は、厚生労働省(2010)の調査によれば2002年時点で中学1年生から高校3年生までの女子生徒で約2%、2009年時点では約1%が発症することが報告されている。発症率が下がっている一方で、摂食障害の前駆的な症状である不健康なやせの特徴をもつ女子生徒は2002年時点で、中学3年生で約5%、高校3年生で約13%、2010年時点で中学3年生で約20%、高校3年生で約22%と急激に増加している。このことから、思春期の摂食障害への予防や治療などの対応策を考えていくことが喫緊の課題といえる。心理学分野の研究からは、すでに発症している子どもに対し、青年期以降に深刻化しないよう、思春期に顕著となる性同一性の課題と摂食障害の治療方法に焦点があてられていることがわかる。

c) 青年期

青年期を対象とした研究は47本中37本(62.71%)と最も多かった。青年期の瘦身願望やボディーイメージの歪みと摂食障害傾向の関連の検討(馬場・菅原, 2000)、家族や対人関係のあり方と摂食障害傾向の関連の検討(長谷川・橋本・佐藤, 1999; 齊藤, 2004)、摂食障害を持つ臨床群への心理療法の有用性や効果、病態理解についてが主な研究のテーマだった(佐藤, 1998; 寺沢・伊集院, 1999)。

d) 成人期・中年期

成人期を対象とした研究は47本中5本(8.47%)、中年期を対象とした研究は47本中1本(1.69%)だった。これらの論文は全て、摂食障害を持つ臨床群への心理療法の有用性や効果、病態理解についてが主な研究のテーマだった(高橋, 2011; 竹田, 2012)。発症から長期間症状が続いている重篤な摂食障害の女性を対象としている点が、思春期・青年期の研究との違いであった。

以上のように、摂食障害の研究では、思春期・青年期を中心に摂食障害につながる要因検討や治療方法が検討されていた。一方で、予防的研究は早くとも児童期までにとどまり、乳幼児期における予防的研究、要因検討の研究はされていないことがわかった。

3. 社会的交流の研究

1) 全体の傾向

社会的交流を扱った研究は16本であった。研究対象の分類では、「乳幼児期」が9本(40.91%)と一番多く、次いで「児童期」が6本(27.27%)、「青年期」が4本(18.18%)、「思春期」が3本(13.64%)、成人期・中年期・老年期を対象としたものはなかった(図5)。乳幼児期から思春期における研究は、母子または家族を対象としている研究が含まれており、特に乳幼児期に多くあった。

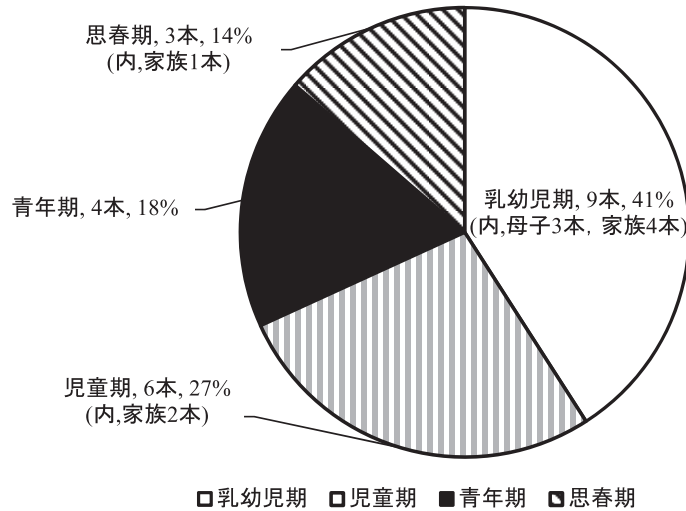


図5 社会的交流に関する研究における研究対象の分類の内訳 (N=22、複数回答)
※括弧内に母子、家族を対象とした論文数を掲載した。

2) 研究対象ごとの傾向

a) 乳幼児期

乳幼児期を対象とした研究は16本中9本(40.91%)であった。これらは、母子間、家族間、友人間での食事での相互交流の様相や援助の仕方について取り上げていた。親子の相互交流に関するものが多く、9本中7本が該当した。主に母子の相互交流の様相を母親の行動や発話内容から分析し、食事の進み具合で、母親が食事のことを話すか、それ以外のことを話すかを選択していることを明らかにしていた(外山, 2008)。また、家族間での相互交流では、親の養育行動が子どもにどのような影響を与えるかが述べられていた。特に子どもの意図に反した摂食促しの行動が、子どもの反抗的態度や行動、情緒の崩れを引き起こすことが示唆されていた(福田, 2007)。

友人間での相互交流では、年齢による友人間の相互交流の様相が異なることについて取り上げられていた。外山(1998)は、2歳児と4歳児の食事場面での席取り行動を観察し、対面や斜めの位置関係よりも、隣合わせあるいは直角に並ぶ位置関係を子どもたちが好み、言語発達が未熟な段階では、身体的接触がおこりやすいヨコの関係で相互交流が起こりやすいことを明らかにしていた。

b) 児童期

児童期を対象とした研究は16本中6本(27.27%)であった。主に食事中の会話から、手続きに関する知識であるスクリプトがどのように発達するのか(外山, 1991; 外山・鈴木, 1993)、食事中のコミュニケーションと家族イメージに関連があるかについて検討されていた(平井・岡本, 2001, 2005)。コミュニケーションが多い家庭ほど、子どもの家族イメージの良好さにつながっていることが示唆されていた。

c) 思春期・青年期

青年期を対象とした研究は16本中4本(18.18%)、思春期を対象とした研究は16本中3本(13.64%)だった。過去の食事体験が現在の食事のあり方や親子関係にどのような影響をもたらすかについて、検討されていた。例えば、伊東他(2007)の研究によれば、幼少期の食習慣は、思春期後期以降の体験よりも現在の食習慣と親子関係に大きな影響を及ぼすことが示唆されていた。

以上のように、社会的交流の研究では、乳幼児期の母子の直接的な相互交流の様相やコミュニケーションの発

達に関する研究が多くなされていた。思春期・青年期になると、それまでの親子間の食事体験が現在の食事習慣や家族イメージに関連するかの研究が主なテーマとなっていた。

V. 結論

1. まとめ

心理学分野における食事の研究は1989年以降活発になり、現在も研究が続けられている。主な研究テーマは、青年期における摂食障害の臨床的課題と、乳幼児期の食事での相互交流に関する研究であった。摂食障害に関する研究では、青年期の女性に焦点をあてた研究は多くあるが、男性や乳幼児期・児童期などの他の対象に焦点をあてた研究は少ない。男性でも摂食障害の発症率が一定数いることや、早期の親子関係や家族イメージの歪みがあることがその後の食行動に影響することも指摘されている（長谷川・橋本・佐藤, 1999; 齊藤, 2004）。そのため、思春期・青年期の女性以外の群でも、摂食障害へつながる心理的メカニズムや要因を明らかにしていく必要があるだろう。

また、社会的交流の研究でも、幼少期の食事体験が現在の親子関係、家族イメージに影響することが指摘されている（平井・岡本, 2001; 伊東他, 2007）。これらのことから、乳幼児期からの食事での相互交流における予防的介入の示唆を得ることが必要だと思われる。しかしながら、乳幼児期の研究では、食事を社会的交流の場として捉え、社会性を育む意味合いを見出すものが多く、乳幼児期に関する臨床的課題のテーマは扱われていなかった。日常生活の中で、子どもに応答的な関わりをすることが後の関係性やメンタルヘルスの良好さにつながるということがわかっている（Forcada-Guex, Pierrehumbert, Borghini, Moessinger & Muller-Nix, 2006; Gul et al., 2016）。我が国の研究でも、食事での相互交流においてどのような関わりが、子どものメンタルヘルスを保証しうるのか、摂食障害の予防となり得るのか、明らかにしていく課題が示唆された。

2. 研究の限界

本研究では、日本の心理学分野に限定し、食事の研究動向と課題を見出した。我が国における心理学分野における課題は明確になったが、様々な分野で研究がなされている食事の研究の動向の一部であることに留意しなければならない。特に摂食障害やその前駆となる食事に関する問題は、精神医学においても重要なテーマであるため、医学分野での研究を含めて検討する必要があるだろう。加えて、海外の動向を含めて、日本の研究状況と比較をし、現在の食事の研究の動向を総括し、その中で日本の研究課題を明らかにしていくことが、今後の課題である。

VI. 利益相反の表示

本論文に関して、開示すべき利益相反に関する事項はない。

【参考文献一覧】

- Anderson, S. E., Gooze, R. A., Lemeshow, S., & Whitaker, R. C. (2012). Quality of early maternal-child relationship and risk of adolescent obesity. *Pediatrics*, 129(1), 132-140.
- 馬場 安希・菅原 健介 (2000). 女子青年における瘦身願望についての研究 教育心理学研究, 48(3), 267-274.
- Dally, P., Gomes, J., & Isaacs, A. J. (1979). *Anorexia Nervosa*. London: William Heinemann Medical Books Ltd. (ダリー, P., ゴメス, J., アイザック, A. J. 渡辺 昌裕・横山 茂生 (監訳) (1984). 思春期やせ症 医歯薬出版)
- Erikson, E. H. (1959). *Psychological issues: Identity and the life cycle*. International Universities Press. (エリクソン, E. H. 小此木 啓吾 (訳編) (1973). 自我同一性——アイデンティティとライフサイクル 誠信書房)
- Faith, M. S., Scanlon, K. S., Birch, L. L., Francis, L. A., & Sherry, B. (2004). Parent-child feeding strategies and their relationships to child eating and weight status. *Obesity research*, 12(11), 1711-1722.
- 藤原 真理・児玉 昌久 (1992). 思春期女性の情動性摂食行動の研究 (II) ——自製仮説と性役割志向性との関係について——健康心理学研究, 5(2), 40-49.

- 福田 佳織 (2007). 幼児の発話に対する家族成員の応答と幼児のポジティブ情動との関連 食事場面に着目して 家族心理学研究, 21(2), 118-133.
- Forcada-Guex, M., Pierrehumbert, B., Borghini, A., Moessinger, A., & Muller-Nix, C. (2006). Early dyadic patterns of mother-infant interactions and outcomes of prematurity at 18 months. *Pediatrics*, 118(1), e107-e114.
- 古郡 曜子・菊地 和美 (2009). 保育所・幼稚園における食の思い出調査. 日本調理科学会誌, 42(6), 410-416.
- Gul, H., Erol, N., Pamir Akin, D., Ustun Gullu, B., Akcakin, M., Alpas, B., & Öner, Ö. (2016). Emotional availability in early mother-child InterActions for children with autism spectrum disorders, other psychiatric disorders, and developmental delay. *Infant mental health journal*, 37(2), 151-159.
- 長谷川 洋子・橋本 幸・佐藤 豪 (1999). 対人関係における基本的構えが摂食障害傾向およびボディ・イメージの歪みに与える影響 健康心理学研究, 12(2), 12-23.
- 平井 滋野・岡本 祐子 (2001). 食事時の会話からみる家族内コミュニケーションと家族の健康性および心理的結合性の関連の検討 家族心理学研究, 15(2), 125-139.
- 平井 滋野・岡本 祐子 (2005). 食事場面の家族画から見た子どもの心理的特徴——小学生・高校生の親との心理的結合性の視点から—— 家族心理学研究, 19(2), 77-90.
- Hoek, H. W., & Van Hoeken, D. (2003). Review of the prevalence and incidence of eating disorders. *International Journal of eating disorders*, 34(4), 383-396.
- 井村 恒郎・小此木 啓吾・懸田 克躬・高橋 義孝・土居 健郎 (編) (1969). フロイト著作集5——性欲論 症例研究—— 人文書院
- 伊東 暁子・竹内 美香・鈴木 晶夫 (2007). 幼少期の食事経験が青年期の食習慣および親子関係に及ぼす影響. 健康心理学研究, 20(1), 21-31.
- 伊藤 裕子 (2001). 青年期女子の性同一性の発達 教育心理学研究, 49(4), 458-468.
- 伊藤 大幸・村山 恭朗・片桐 正敏・中島 俊思・浜田 恵・田中 善大…辻井 正次 (2016). 一般小中学生における食行動異常の実態とメンタルヘルスおよび社会的不適応との関連 教育心理学研究, 64(2), 170-183.
- 加川 真弓 (2006). 強迫的性格をもつ摂食障害女子への心理療法過程——摂食障害例において強迫的な生き方をあつかう意味——心理臨床学研究, 24(5), 571-582.
- 加藤 則子・村田 光範・河野 美穂・谷口 隆・大竹 輝臣 (2004). 0歳から18歳までの身体発育基準について——「食を通じた子どもの健全育成のあり方に関する検討会」報告書より—— 小児保健研究, 63(3), 345-348.
- 厚生労働省 (2010). 「健やか親子21(第2次)」について検討会報告書. Retrieved from <https://www.mhlw.go.jp/stf/shingi/0000041585.html> (2019年7月31日取得)
- 松原 達哉 (1964). 社会的成熟度の発達と形成要因に関する研究 教育心理学研究, 12(3), 152-165.
- 奥田 紗史美・岡本 祐子 (2009). 摂食障害傾向のある青年の拒食と過食の心理的意味と変容プロセス——非臨床群の語りによる分析—— 質的心理学研究, 8, 76-95.
- 斎藤 清二 (2000). 元型的観点から見た摂食障害 心理臨床学研究, 18(1), 13-24.
- 齊藤 千鶴 (2004). 女子大学生の摂食障害傾向に及ぼす家族の食事文化の影響 家族心理学研究, 18(1), 43-55.
- 佐藤 由佳利 (1998). 父を神格化した摂食障害の一事例——一卵性双生児における摂食障害の意味—— 心理臨床学研究, 16(4), 341-352.
- 末松 弘行 (1993). 摂食障害——最近の動向—— 精神医学, 35(1), 6-17.
- 鈴木 幹子・伊藤 裕子 (2002). 女子青年における女性性受容と摂食障害傾向——自尊感情, 身体満足度, 異性意識を媒介として—— 青年心理学研究, 13, 31-46.
- 高橋 蔵人 (2011). 失敗をのりこえること——重度の摂食障害に陥った女性が獲得した自己肯定感から—— 心理臨床学研究, 28(6), 751-762.
- 竹田 剛 (2012). 神経性過食症患者が抱く食事を巡る問題——自己-対人関係の関連性—— 教育心理学研究, 60(3), 249-260.
- 田中 千穂子 (1997). 乳幼児心理臨床の世界——心の援助専門家のために—— 山王出版
- 田邊 泰子・田代 恭子・田中 佑樹・嶋田 洋徳 (2018). 本邦における食行動の問題に関するアナログ研究の動向——摂食障害への臨床的応用を目指した展望—— *Journal of Health Psychology Research*, 30(Special_issue), 179-186.
- 寺沢 英理子・伊集院 清一 (1999). 摂食障害例に対する絵画療法としての「再構成法」の試み 心理臨床学研究, 17(1), 67-79.
- 堤 ちはる (2011). 「食」を通じた子育て支援——幼児期からの食事に望むもの (小児保健の現状と課題, 提言). 小児保健研究, 70, 7-9.
- 外山 紀子 (1991). スクリプトの意味的知識の発達: 食事スクリプトをめぐって 発達心理学研究, 1(2), 87-96.
- 外山 紀子 (1998). 保育園の食事場における幼児の席取り行動 ヨコに座ると何かいいことあるの? 発達心理学研究, 9(3), 209-220.
- 外山 紀子 (2008). 食事場における1~3歳児と母親の相互交渉 文化的な活動としての食事の成立 発達心理学研究, 19(3), 232-242.
- 外山 紀子・鈴木 高士 (1993). 手続きに関する知識の柔軟性をもたらす要因 発達心理学研究, 4(2), 171-180.
- 外山 紀子・無藤 隆 (1990). 食事場における幼児と母親の相互交渉 教育心理学研究, 38(4), 395-404.
- 浦上 涼子・小島 弥生・沢宮 容子・坂野 雄二 (2009). 男子青年における瘦身願望についての研究 教育心理学研究, 57(3), 263-273.

大塚 日本の心理学分野における食事の研究動向と今後の課題

山下 宗利 (1992). わが国における食文化の地域性とその変容 佐賀大学教育学部研究論文集, 39, 115-133.

吉田 須美子・岡崎 光子 (2009). 世帯の所得は子どもの成長および食生活に影響を及ぼすか——モンゴルウランバートルの場合—— 小児保健研究, 68(3), 380-386.